

中学校英語検定教科書における動詞の出現頻度調査：現状と課題

眞野美穂*, 鈴江涼子**

(キーワード：英語教育, 教科書分析, 動詞, 新 JACET8000, 頻度)

1. はじめに

言語を習得するうえで、語彙に関する知識はなくてはならないものであり、どのような語彙をいつ導入するかは言語教育における大きな問題の一つである。しかし、日本での英語教育を考えると、どのような語彙をどのくらい学ぶべきかについての共通理解はまだ存在せず、語彙の選択については教科書会社に任せられているのが現状である。しかし、英語教育において教科書の果たす役割は非常に大きく、教科書で使用される語彙とその頻度は学習者の中間言語に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

このような状況の中で、教授者である教員は、そこで使用される語彙についてどこまでの情報を与えられているだろうか。どのような語彙がその教科書で使用されているかについては、教科書巻末の語彙リストから把握することができる一方で、どの語がどのような意味でどのくらいの頻度で使用されているのかということについては情報が提供されていないため、把握できないのが現状であろう。動詞を例にあげると、教員は直感的に、*be* 動詞、*have*、*do* などについては、教科書内での使用頻度が高いことは予測できるであろうが、その度合いや、どのような形式での使用が多いかについては予想が難しいであろう。しかし、その使用状況が明らかにされれば、どのような動詞を含む例文を追加すべきか、などの授業内での工夫が可能になるだろう。

本稿はこのような現状に対して、特に文の構造を決定するにあたり中心的な役割を果たす動詞に着目し、教科書分析を行う。現行中学校英語検定教科書すべてにおける各動詞の使用頻度の実態を教科書別に明らかにすることにより、その実態と問題点を明らかにすることを目的とする。

現行の中学校学習指導要領(外国語)(文部科学省, 2008)での語彙についての扱いは、表1(次頁)に抜粋するように、「1200語程度」の「運用度の高いものを用い、活用することを通して定着を図るようにすること」と記載があるのみであり、具体的な語彙は指定されていない¹⁾。そのため、使用語彙については教科書会社にゆだねられている現状がある。さらに、平成29年3月に公示され、小学校では平成32年4月1日から、中学校では平成33年4月1日から施行されることになる新学習指導要領では、小学校5, 6年での英語教科化に伴い「第3学年及び第4学年において第4章外国語活動を履修する際に取り扱った語を含む600-700語程度の語(文部科学省, 2017a)」, 中学校では、「小学校で学習した語に1600~1800語程度の新語を加えた語(文部科学省, 2017b)」, と中学卒業までに合計で2200-2500語程度という数字が示されており、現在と比べて大幅に増加することになる。そのため、どのような語を扱うべきかという点は、より重要な問題になることが予想される。

しかし、現状では教科書の動詞の頻度に焦点を当て、現行教科書を横断的に調べたものは管見の限り見当たらず、そこでの問題を明らかにすることは喫緊の課題である。近年、様々なコーパスの充実から、学習者に必要とされる語彙はかなり具体的に提案されてきている。教科書の問題を指摘する上で、そのような研究成果も生かしながら検討を行い、提案を行いたい。

*鳴門教育大学言語系コース(英語)

**徳島市加茂名中学校

表1. 現行中学校学習指導要領（外国語）一部抜粋（平成24年4月施行）（文部科学省，2008）

<p>第1 目標</p> <p>外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。</p> <p>ウ 語，連語及び慣用表現</p> <p>(ア) 1,200語程度の語</p> <p>(イ) in front of, a lot of, get up, look for などの連語</p> <p>(ウ) excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome, for example などの慣用表現</p> <p>3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>(1) 指導計画の作成に当たっては，次の事項に配慮するものとする。</p> <p>オ 語，連語及び慣用表現については，運用度の高いものを用い，活用することを通して定着を図るようにすること</p>

2. 先行研究の概観

2.1. 語彙に関する第二言語習得研究・教育学的な研究

言語学習の中での語彙の習得の重要性は明らかであり，それを否定する人はいないだろう。そして，近年語彙の習得に関しては，様々な角度から様々な側面について研究が行われてきた(cf. Bogaards and Laufer, 2004)。なぜなら，Nation (2001) が指摘するように，語彙の知識には表2のように様々な側面が含まれており，それは言語の習得に大きくかかわるからである。さらにそれらの知識の習得には，Laufer (1997) が指摘する，学習者にとってのその語の発音の容易さのような音韻的要因，派生の規則性のような文法的要因，意味的要因が関わるだけでなく，頻度や品詞による差も指摘されている。

表2. What is involved in knowing a word (Nation, 2001 : 27)

Form	spoken	R	What does the word sound like?
		P	How is the word pronounced?
	written	R	What does the word look like?
		P	How is the word written and spelled?
	word parts	R	What parts are recognisable in this word?
		P	What word parts are needed to express the meaning?
Meaning	form and meaning	R	What meaning does this word form signal?
		P	What word form can be used to express this meaning?
	concept and referents	R	What is included in the concept?
		P	What items can the concept refer to?
	associations	R	What other words does this make us think of?
		P	What other words could we use instead of this one?
Use	grammatical functions	R	In what patterns does the word occur?
		P	In what patterns must we use this word?
	collocations	R	What words or types of words occur with this one?
		P	What words or types of words must we use with this one?
	constraints on use (register, frequency...)	R	Where, when, and how often would we expect to meet this word?
		P	Where, when, and how often can we use this word?

Note : In column 3, R=receptive knowledge, P=productive knowledge.

本稿では、特に学習者がその語彙に出会う頻度に注目する。なぜなら、語彙学習と頻度の関係についての研究は、ある語に6回以上繰り返し出会うと学習が進むという Saragi, Nation, and Meister (1978) の研究を始め、それ以降多数なされてきており、その影響は明らかであるにも関わらず、各教科書で情報は提供されておらず、作成の際にも重視されていないと推測される点で問題があるからだ。Zahar, Cobb, and Spada (2001) は、学習者のレベルと語の出現頻度、文脈のサポートの関係を実験的に調査し、頻度と語彙の学習には相関があり、学習者のレベルが低いほどその相関が高いことを明らかにしている。Zahar らの研究では、事後のテストでの最も学習された語の平均出現数は7回であり、最も学習されなかった語の平均出現数は2.75回であった。このことは、先の研究で指摘されている6回以上の出現が学習を促進するという指摘を支持する結果である。文脈のサポートの有無については語彙学習との相関は見られなかったとのことである。特に、本稿が対象とする中学での英語教育においては、学習者は初級レベルであり、繰り返しどのくらいその語に出会うかが、語彙の習得に大きく影響すると考えられ、非常に頻度の低い語彙については、その頻度をあげるため、授業内での何らかの対策が必要となるだろう。

2.2. 語彙に着目した教科書分析と課題

教科書で使用されている語彙の調査は、これまでも行われてきた。しかし、現行の教科書の発行が2016年であるため、現行教科書を対象に行った調査は、まだ限られている。まずは旧版までの研究を概観したい。コンピューターでの教科書コーパス作成・分析が可能となった2000年代以降は、教科書の語彙研究の興味の中心は、出現語彙の統計的な調査と分析であったと言える。長谷川・中條(2004)は、1980年代から2000年代までの期間、採択数上位にあった中高教科書(中学校では *New Horizon*, 高校では *Unicorn*)を対象に語彙の年代比較を行い、「異語数」に関しては2000年代まで大きな減少は見られなかったが、「延べ語数」に関しては減少し、その結果、1語あたりの反復回数が減少していることが指摘されており、その習得への懸念が示されている。また、松尾(2013)は、平成17年検定済み教科書(*New Horizon English Course 3*)と、平成23年検定済み教科書(*New Horizon English Course 3*)を語彙を中心に比較し、異語数で三割程度増加していることを報告している。また、JACET 8000のうちの頻度上位1000語レベルのものと KOCHI 語彙リストとも比較を行い、基本語で抜けている語も指摘している²。村岡(2010)も平成17年度版についての調査であるが、6社の教科書の調査から、教科書ごとに語彙に差がみられること、共通で学ぶ語はわずか441語であることを明らかにしている。反復回数の多い語の少なさについても指摘がある。この問題は現行教科書ではどのようになっているだろうか。

現行教科書の調査は非常に限られているが、その一つに、投野(2016)がある。投野(2016)は、現行の中学英語教科書を量的に分析し、旧版と比べ、語彙的な増加、総語数の大幅な増加がみられることを明らかにした上で、教科書語彙の選定基準が教科書会社の自由裁量にかなりの部分まかされていること、それにもかかわらず語彙選定の基準は各社で明確ではないという現状を指摘している。大規模なコーパス調査から分かってきた重要語が網羅されているかというところではない現状の問題についての指摘もある。このように、これまでの教科書から現行の教科書に至るまで、多数の調査研究がなされているものの、扱う語彙についての問題は現行教科書においても残っていることが分かる。

しかし、現行教科書についてはまだ詳細に個々の語彙とその頻度を分析した研究は見られない。本稿はこのような現状の中で、文の組み立てに大きな役割を果たす動詞に焦点を当てて教科書を分析することで、現状を明らかにする。さらに、様々なデータに基づいて新しく作成された『新 JACET8000』(第4.1節を参照)で提案されている中学生用語彙と比較することでその問題点を指摘する。そして、今後の教科書作成と授業作りに必要な側面について提案を行いたい。

3. 中学校英語検定教科書調査

3.1. 現行中学校学習指導要領と中学校英語検定教科書

第二節で確認したように、これまでの第二言語習得研究において、語彙学習の重要性、初期の段階での語彙の選択の重要性が明らかにされてきた。しかし、日本における英語教育で実際使用されている教科書ではどのような語彙がどのような頻度で使用されているのだろうか。

本研究では、2016年度より使用されている現行の以下にあげる6種類の中学校英語検定教科書、合計18冊を対象に調査を行った。以下、教科書名は括弧内の略称を使用する(例えば、「NC-1」は『New Crown English Course

1』を指す)。

Columbus 21 English Course 1 - 3 (C21)	(光村図書, 2016)
New Crown English Series New Edition 1 - 3 (NC)	(三省堂, 2016)
New Horizon English Course 1 - 3 (NH)	(東京書籍, 2016)
One World English Course 1 - 3 (OW)	(教育出版, 2016)
Sunshine English Course 1 - 3 (SS)	(開隆堂, 2016)
Total English 1 - 3 (TE)	(学校図書, 2016)

3.2. 調査方法

まず、教科書における動詞の頻度を調査するにあたり、その範囲と手順、そして基準を示す。なぜなら、教科書は様々な部分から構成されており、どの範囲を数えるか、そしてどのような形で生じたときに数えるかによって、結果は異なるからである。

調査範囲は、全教科書において、Unit/ Program/ Chapter 等³の開始ページから付録の前までの部分とした。付録以降は教科書間で差異が大きいこと、そして実際の授業では使用されないことが多いこと、付録にある語彙リスト内の例文を生徒が目にする機会には個人差が大きいと考え、この範囲とした。各教科書における対象範囲は表3のとおりである。また、教科書下部などに記載されている音韻情報の提示のための文や、サイドに記載されることの多い新出語の欄で使用される文についても調査対象としている。

表3. 各教科書の調査範囲

学年	教科書	C21	NC	NH	OW	SS	TE
1		pp. 19-143	pp. 20-128	pp. 12-130	pp. 18-126	pp. 14-124	pp. 20-134
2		pp. 5-129	pp. 6-115	pp. 4-121	pp. 4-108	pp. 8-114	pp. 5-134
3		pp. 5-103	pp. 6-111	pp. 4-111	pp. 4-89	pp. 8-95	pp. 5-124

本研究の目的は、文の構造（厳密にいうと項構造）の決定に重要な役割を果たす動詞に着目し、学習者が教科書の中でどのような動詞にどのくらい文の形で出会っているのかを調査することである。完全文の中に生じた動詞を数えることを原則とし、そのため検索プログラムを使うのではなく、著者二人が教科書を読み、先に述べた範囲で(1)のような完全文に生じる動詞（下線部）を数えるという調査を行った。そのため、より実際の学習者が触れる動詞の状況について詳細な調査が可能になる。

- (1) a. **Are** you enjoying your stay? (TE-3 : 38)
 b. They **are** trying to catch fish.

また、(2)のように日本語での説明部分に含まれていても、完全文であれば、調査対象としている。

- (2) …しかし、“Let’s eat.” や “Looks delicious.”, “I’m full.” や “I’m finished.” のように言うことで、食事の際にコミュニケーションをとることができます。 (OW-3 : 20)

そして、(3)に示すような、句や穴埋めなどの不完全文や非文としての例文は調査対象とはしなかった。また、歌の歌詞については文以外に様々な単位（文・節・句・単語）のものが含まれる可能性があること、曲によっては単語での繰り返しが多いものもあり、特定の動詞の頻度を極端に上げることになる可能性があることから、調査対象からは外すことにした。

- (3) a. You’re..., right? (NH-3 : 24)
 b. How long _____ Liz wanted (ibid. : 25)
 c. How long + have [has] + 主語 + 過去分詞? (ibid.)

また、学習者が文の構造を決定する際に大きな役割を果たす動詞に着目するため、(1a)や(4)で太字で示すように助動詞的な *be* (受け身・進行形), *have* (完了形), *do* (疑問文・否定文), *be going to* のような成句に含まれ主動詞として働いていないもの (ここでは *be* と *go*) は動詞として数えず、(5)に見られるように動詞としての機能を果たす場合にのみ数えることとした。

- (4) a. It **was written** by my grandfather. (SS-2 : 98)
 b. **Have** you ever **heard** of Bhutan? (TE-3 : 58)
 c. What **do** people **living** in Bhutan **grow**? (ibid.)
 d. The lion and the tiger **are going to fight**. (OW-3 : 34)
- (5) a. **Let's go** together. (SS-1 : 41)
 b. How **are** you **doing**? (ibid. : 101)

(6)のような動詞の過去分詞形、現在分詞形の修飾的用法については、動詞の項構造が関係するため、形容詞化しているものも含め、すべて調査対象とした。

- (6) a. Ururu is just an **interesting** place. (NW-2 : 62)
 b. I was **excited to be** there. (OW-3 : 11)

3.3. 教科書調査結果

3.3.1. 教科書内動詞出現頻度と形態

本節では、調査で得られた動詞の出現頻度結果を示す。異なり語数 (レマ) では、動詞の活用形をすべて含み (例 : *take, takes, took, taken, taking, to take*), 1語としている。表4に示すように、全教科書における動詞の延べ語数は約2797~4134語の間であり、全教科書の平均延べ語数は3389.2語であった。

表4. 教科書に出現した全動詞の延べ語数と異なり語数

語数 \ 教科書	C21	NC	NH	OW	SS	TE	平均
延べ語数	3167	3488	3297	2797	3452	4134	3389.2
異なり語数 (レマ)	231	252	242	225	226	218	232.3

教科書ごとに動詞の延べ語数、異なり語数共に差異が観察される。延べ語数では、TEでの多さが目立つ。動詞の延べ語数が多いということは、教科書で扱われている総文数も多いことが予想される。異なり語数 (レマ) に関しては、218~252語の範囲であり、平均は232.3語であった。学習指導要領 (文部科学省, 2008) での語彙数 (1200語) から見ると、その五分の一程度が動詞によって占められているといえるだろう。

また、これらの語がどのような形で使用されているか、中学校で学ぶ主動詞・動名詞・分詞 (現在・過去)・*to* 不定詞に絞って異なり語数を調査すると、表5のようになった。

表5. 教科書で使用された動詞の形 (異なり語数)

形態 \ 教科書	C21	NC	NH	OW	SS	TE
主動詞	208	232	222	196	208	203
動名詞	34	34	27	40	28	34
to 不定詞	72	64	80	74	71	76
分詞 (現在・過去)	11	10	16	19	32	18

表4の異なり語数とそれぞれ比較すると、必ずしもすべての動詞が主動詞として使用されているわけではないことが分かる。また、主動詞以外の用法を導入されている動詞は限られたものであることも、表5から分かるだろう。主動詞以外については、各形式の導入時期が一つの要因となっていることは明らかであるが (動名詞 : 2年,

to不定詞：2年，分詞：3年），それでもかなり限られた動詞でのみこれらの形式が使用されているということは事実として把握しておくべきであろう。教科書間の差異も大きいことも特徴としてあげられる。

3.3.2. 高頻度語にみられる傾向

次に，どのような動詞が頻出しているのか，その傾向を示したい。表6（次頁）に，各教科書における上位30位までの動詞の頻度とその教科書における延べ語数全体における割合を示す。出現頻度が同じものがあるため，上位30語ではない点には注意されたい。表6から分かる傾向としては，まず教科書間で高頻度語は類似しているという点があげられる。上位10位までに入っている語を教科書間で比較すると，6つの動詞（網掛けをしている *be, have, like, play, go, see*）がすべての教科書において上位10位以内に含まれている。

二つ目の特徴として指摘できるのが，頻度の大きな偏りである。すべての教科書において，上位10位の頻度が全動詞の延べ語数の約5割を占め，表6から分かるように上位30位の語で約70-75%を占めるという状況が観察された。また，学習が進むと考えられている6回以上出現する動詞（レマ）の語数をまとめると⁴，各教科書において図1のようになり，かなり限られた数の動詞が頻繁に使用されている状況，そして半数以上の語の頻度が十分ではないことが分かるだろう。

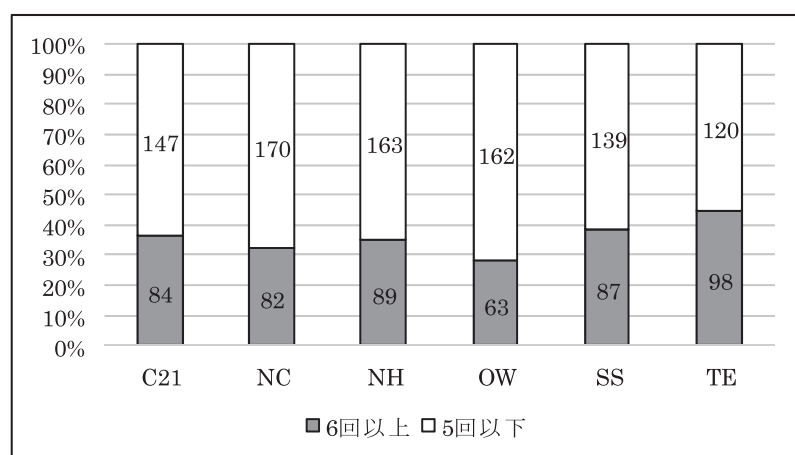


図1. 各教科書で6回以上出現する動詞数と5回以下の動詞数(レマ)とその割合

また，*be*動詞の使用頻度の極端な高さ（全体の約3割）も指摘できる。本調査では，受け身や進行形における*be*動詞の助動詞的使用は含まれていないことを考慮すると，学習者が*be*動詞を教科書の中で目にする頻度は非常に高いと考えられる。各活用形別の頻度は，表7の通りであり，太字にした *is*（平均54.5%）と *are*（平均16.1%）の頻度の高さが目立つ結果となった。特に *is* がその半数以上を占めているという偏りは注目に値する。

同様に，全教科書で使用頻度の高い *have* についても，完了形などの *have* は数えていないことを考えると，同じく学習者がかなりの高頻度で接している語であるといえるだろう。

表7. *be*動詞の活用形別使用頻度

	C21	NC	NH	OW	SS	TE
<i>be</i>	30	31	15	24	41	19
<i>is</i>	455	520	536	462	558	616
<i>am</i>	107	96	108	70	99	114
<i>are</i>	144	238	155	104	123	164
<i>was</i>	99	91	98	78	76	120
<i>were</i>	20	18	7	18	27	30
<i>been</i>	26	21	22	11	24	28
<i>being</i>	0	0	0	3	0	0
<i>to be</i>	30	20	21	32	19	11
合計	911	1035	962	802	967	1102

表6. 各教科書における高頻度動詞（上位30位）

C21			NC			NH			OW			SS			TE		
verb	freq.	%	verb	freq.	%	verb	freq.	%	verb	freq.	%	verb	freq.	%	verb	freq.	%
1	911	28.77%	1	1035	29.67%	1	962	29.18%	1	801	28.64%	1	967	28.01%	1	1102	26.66%
2	125	3.95%	2	139	3.99%	2	142	4.31%	2	132	4.72%	2	143	4.14%	2	190	4.60%
3	104	3.28%	3	138	3.96%	3	85	2.58%	3	131	4.68%	3	126	3.65%	3	169	4.09%
3	104	3.28%	4	127	3.64%	4	84	2.55%	4	126	4.68%	4	106	3.07%	4	114	2.76%
5	79	2.49%	5	96	2.75%	5	82	2.49%	5	78	2.79%	5	85	2.46%	5	93	2.25%
6	77	2.43%	6	83	2.38%	6	81	2.46%	6	61	2.18%	6	74	2.14%	6	91	2.20%
7	71	2.24%	7	81	2.32%	7	68	2.06%	7	54	1.93%	7	74	2.14%	7	73	1.77%
8	68	2.15%	8	68	1.95%	8	62	1.88%	8	51	1.82%	8	65	1.88%	8	68	1.64%
9	61	1.93%	9	55	1.58%	9	56	1.70%	9	50	1.79%	9	62	1.80%	9	66	1.60%
10	55	1.74%	10	54	1.55%	10	55	1.67%	10	48	1.72%	10	59	1.71%	10	65	1.57%
11	54	1.71%	11	53	1.52%	11	51	1.55%	11	46	1.64%	11	54	1.56%	11	62	1.50%
12	48	1.52%	12	50	1.43%	12	50	1.52%	12	42	1.50%	12	52	1.51%	12	57	1.38%
13	46	1.45%	13	49	1.40%	13	49	1.49%	13	39	1.39%	13	51	1.48%	13	55	1.33%
14	42	1.33%	14	45	1.29%	13	49	1.49%	14	36	1.29%	14	48	1.39%	13	55	1.33%
15	41	1.29%	15	41	1.18%	13	48	1.46%	15	33	1.18%	14	48	1.39%	15	54	1.31%
16	40	1.26%	16	40	1.15%	16	43	1.30%	15	33	1.18%	15	48	1.39%	16	53	1.28%
17	39	1.23%	2	40	1.15%	16	43	1.30%	17	32	1.14%	16	44	1.27%	17	52	1.26%
18	36	1.14%	16	38	1.09%	18	41	1.24%	18	29	1.04%	18	43	1.25%	18	44	1.06%
19	35	1.11%	18	35	1.00%	19	34	1.03%	18	29	1.04%	19	40	1.16%	19	43	1.04%
20	32	1.01%	18	35	1.00%	20	31	0.94%	20	28	1.00%	20	36	1.04%	19	43	1.04%
21	31	0.98%	20	33	0.95%	21	28	0.85%	21	27	0.97%	20	36	1.04%	21	42	1.02%
21	31	0.98%	20	33	0.95%	22	27	0.82%	21	27	0.97%	22	34	0.98%	22	41	0.99%
23	28	0.88%	22	32	0.92%	22	27	0.82%	23	24	0.86%	23	32	0.93%	23	40	0.97%
24	26	0.82%	22	32	0.92%	24	26	0.79%	23	24	0.86%	24	31	0.90%	23	40	0.97%
25	24	0.76%	24	30	0.86%	24	26	0.79%	24	23	0.82%	25	30	0.87%	25	36	0.87%
26	23	0.73%	25	28	0.80%	24	26	0.79%	25	22	0.79%	26	29	0.84%	26	35	0.85%
27	20	0.63%	26	27	0.77%	27	23	0.70%	26	19	0.68%	27	28	0.81%	27	34	0.82%
27	20	0.63%	27	26	0.75%	27	23	0.70%	26	19	0.68%	28	26	0.75%	27	34	0.82%
29	19	0.60%	27	26	0.75%	29	22	0.67%	26	19	0.68%	29	25	0.72%	29	33	0.80%
30	18	0.57%	29	22	0.63%	30	21	0.64%	26	19	0.68%	30	24	0.70%	30	31	0.75%
合計		72.89%	合計		75.56%	合計		71.77%	合計		74.62%	合計		72.86%	合計		72.03%
			29	22	0.63%	29	22	0.63%	26	19	0.68%	26	19	0.68%	30	31	0.75%
			29	22	0.63%	29	22	0.63%	26	19	0.68%	26	19	0.68%	30	31	0.75%
			合計		75.56%	合計		71.77%	合計		74.62%	合計		72.86%	合計		72.03%

最後に、頻出する動詞の意味を考えたい。30位までの動詞(表6)を見てもわかるように、生徒がコミュニケーションの中で活用するために必要な語彙の頻度が高くなっているようである。現行学習指導要領では「語、連語及び慣用表現については、運用度の高いものを用い、活用することを通して定着を図るようにすること。(文部科学省, 2008)」とあり、この点が意識されていると考えられる。

3.3.3. 低頻度語とその問題

次に、教科書内での出現頻度が低い語について、見ていきたい。まず、前節の図1から、習得が難しいと考えられる5回以下の使用頻度の語が語彙の6割程度を占めることを見た。さらに、使用頻度が1回限りの語が、表8に示すように、各教科書においてかなりの数存在し、各教科書で使用されている動詞の二割から三割を占めることがわかる。これらの動詞は、学習者にとって語彙としての定着は難しいと考えられる。

表8. 使用頻度1回のみ動詞とその割合

語数 \ 教科書	C21	NC	NH	OW	SS	TE	平均
頻度1回の動詞	65	85	62	71	62	48	65.5
異なり語数(レマ)に占める割合	65/231 (28.1%)	85/252 (33.7%)	62/242 (25.6%)	71/225 (31.6%)	62/226 (27.4%)	48/226 (21.2%)	(28.0%)
例	<i>dream, serve, wish</i>	<i>answer, bring, last</i>	<i>follow, lead, rain</i>	<i>close, join, hurt, set</i>	<i>fall, reach, invite, turn</i>	<i>cut, raise, push, smell</i>	

また、表8で例に示したような日常生活での使用頻度が高いと考えられる動詞も多く含まれている点には注意が必要である。2.2節で指摘したように、6回以上という頻度でその後繰り返し出会った場合習得は進むことが考えられるが、1回など特に低い頻度での習得は難しいことが示唆される。

3.3.4. 全教科書に共通して出現する語

最後に、全教科書で共通して出現する語を調べた。6社すべての教科書で使用されていた動詞は、(7)にあげる125語⁵であった。表4で示した通り、全教科書での平均異なり語数(レマ)が232.3語であったことを考えると、約半数強の語が全教科書で共通して使用されていると言える。逆に言えば、残りの半数弱の使用動詞は各社でばらつきが見られるということになる。

- (7) *agree, answer, ask, be, bear, become, begin, believe, bring, build, buy, call, catch, change, choose, clean, come, continue, cook, cut, die, do, drink, eat, end, enjoy, excite, excuse, feel, fight, find, finish, fish, fly, forget, get, give, go, grow, have, hear, help, hit, hold, hope, interest, introduce, join, keep, know, learn, leave, let, listen, live, look, lose, love, make, mean, meet, miss, move, need, open, pass, plant, play, practice, produce, read, put, rain, raise, receive, recycle, remember, respect, return, run, save, say, see, sell, send, serve, share, shock, show, sing, sit, sleep, sound, speak, spend, stand, start, stay, stop, study, surprise, swim, take, talk, teach, tell, thank, think, throw, tire, try, turn, understand, use, visit, wait, walk, want, wash, watch, wear, win, work, worry, write*

本節では、頻度の偏り、低頻度語の問題、共通して使用されている語についての実態を明らかにした。しかし、それは大きな偏りを持つものであった。本当にこれほどの使用頻度の偏りが必要なのであろうか。そして、本当に必要な語が高頻度で使用されているのであろうか。また、このような教科書の実態の中、その使用にあたってどのような対策が可能だろうか。次節では、本節で得られた調査結果をもとに、考察を行いたい。

4. 考察

4.1. 語の選択

第三節で、中学校教科書に使用されている動詞の傾向を明らかにしたが、教科書間のばらつきも大きい中、問題となるのは本当に必要な語が十分使用されているのか、という点である。そこで、日本人の英語学習の実態を

考慮し、中学・高校の検定教科書、高校・大学入試、TOEFL・TOEIC・英検などで使用される語彙を分析し、コーパスから得られた母語話者の使用する英語語彙と共に分析し、順位付けし、提案された「大学英語教育学会基本語リスト 新 JACET8000」(大学英語教育学会基本語改訂特別委員会, 2016; 以下「新 JACET8000」)と比較を行う。新 JACET8000 では、中学・高校コミュニケーション支援語彙リストが示されており、中学コミュニケーション支援語彙リストには1245語が提案されている。中学生用の語彙には品詞の記載がなかったため、まずはこれらの語を記載の順位から新 JACET8000 のリストと比較することにより、その中の動詞を抜き出したところ、185語あった(以下、「中学生用動詞語彙」)⁶。つまり、それらは様々な言語データに基づき中学生が知っておくべき基本的な動詞として具体的に提案されたものだと考えられる。数としては表4にあげた各教科書で使用されている動詞(異なり語数)の数より少ないものであるが、その中身はどのくらい共通点を持つものであろうか。

この中学生用動詞語彙において、上位30位以内の動詞が、各教科書においてどのくらいの頻度で使用されているかをまとめたものが表9(次頁)である。比較しやすいように、各教科書において30位より下の順位である語には網掛けを施している(頻度5回以下のものは濃い網掛け)。

表9から分かるように、14位までの動詞については、実際の教科書内でも使用頻度は高く、重要な語として頻繁に使用されていることが分かる。しかし、15位以下では網掛けのある語が目立つ。つまり、これらの語は新 JACET8000 においては、中学生に必要な語彙として重視されているにも関わらず、実際の教科書の中では使用頻度が低い。例えば、中学生用動詞語彙では22位である *keep* は各教科書において10回以下の使用頻度であり、27位である *believe* においては一回のみという教科書も存在している。使用語彙に特に規定がない現在の状況では、このように教科書間の差異が様々な面で観察され、それが本当に必要な語彙の習得の妨げとなっている可能性は否めない。

また、3.3.4節では全教科書で共通して使用されている125語の動詞をあげたが、それを中学生用動詞語彙と比較すると、大部分(98語)は中学生用動詞語彙に含まれるものであることが分かった。一方で、中学生用動詞語彙の残りの87語については、その使用が教科書によって異なる状況にあると言える。そして、(8)にあげる27語は、全社共通で使用されているにも関わらず、中学生用動詞語彙には含まれていない。

(8) *answer, bear, bring, change, choose, clean, drink, end, excite, fight, fish, fly, interest, love, miss, open, plant, practice, rain, respect, return, shock, sound, surprise, throw, tire, work*

これらの結果から、やはり語の選択については、教科書ごとに偏りがあり、必ずしも必要とされる基本的な動詞すべてが教科書で導入されていない点を、教師は意識する必要があると言える。一つの基準として本稿では新 JACET8000 を使用したが、何らかの形で意識的に教科書で使用されない重要語を導入する工夫が必要とされるだろう。また、次期学習指導要領(文部科学省, 2017a, b)に基づいた新教科書作成には、より多くの語彙が使用されることになるため、投野(2016)も指摘するように、何らかの基準を定めない限り、教科書間の差異はさらに大きくなることが予想され、特に小中高を通した英語教育を考えると、非常に大きな問題となるだろう。

4.2. 限られた用例の提示とその対応

次に、より具体的に教科書を観察し、どのように改善できる可能性があるかを、三点議論したい。

まず、全教科書において非常に使用頻度の高い *be* 動詞(全教科書で一位)について考えたい。各教科書では、*be* 動詞が総数の3割近くを占めているが、実際にそこまで *be* 動詞の使用が必要なのだろうか。他の動詞を使うことで、もっとバランス良く動詞の習得を促せるのではないかと、という点を検討する。例えば、各教科書では2年生で比較表現を学習することになっている。そこで使われる(9)のような基本文⁷に使われている主動詞⁸を調査した結果を表10(305頁)に示す。

(9) a. Tom is younger than Koji. (NC-2 : 86)
 b. This book is more interesting than that one. (OW-2 : 82)

基本文43文中、30文(69.7%)が *be* 動詞の文で、更に、その内の26文が *is* を用いた文であった。新しい文法を指導する際は、生徒の負担を軽減するために、できるだけ分かりやすい表現を用いる。しかし、それを考慮しても、この動詞の偏りには問題があると思われる。活用することを通して語彙の定着を図るためには、運用度の高

表9. 新 JACET8000 (中学生用動詞語彙) 上位30位以内の動詞と各教科書内での順位 (頻度)

順位	語彙	新 J8 内順位	C21	NC	NH	OW	SS	TE
1	<i>be</i>	9	1(911)	1(1035)	1(962)	1(801)	1(968)	1(1102)
2	<i>have</i>	17	2(125)	4(127)	2(142)	2(132)	2(143)	2(190)
3	<i>do</i>	27	8(68)	9(55)	13(49)	7(54)	5(85)	12(57)
4	<i>say</i>	37	11(54)	18(35)	19(34)	18(29)	20(36)	15(54)
5	<i>know</i>	52	12(48)	13(49)	13(48)	11(46)	16(44)	10(65)
6	<i>like</i>	64	3(104)	3(138)	3(85)	3(131)	3(126)	3(169)
7	<i>think</i>	65	10(55)	16(40)	9(56)	10(48)	10(59)	13(55)
8	<i>get</i>	67	13(46)	14(45)	16(43)	8(51)	18(43)	21(42)
9	<i>see</i>	74	7(71)	5(96)	4(84)	9(50)	8(65)	8(68)
10	<i>go</i>	79	3(104)	6(83)	7(68)	5(78)	4(106)	4(114)
11	<i>make</i>	94	15(41)	8(68)	8(62)	14(36)	12(52)	13(55)
12	<i>want</i>	100	6(77)	7(81)	6(81)	6(61)	11(54)	5(93)
13	<i>take</i>	104	14(42)	16(40)	11(51)	13(39)	13(51)	22(41)
14	<i>come</i>	115	9(61)	15(41)	13(49)	12(42)	9(62)	16(53)
15	<i>mean</i>	136	95(4)	40(15)	52(11)	41(11)	95(4)	47(17)
16	<i>look</i>	137	17(39)	12(50)	10(55)	21(27)	6(74)	9(66)
17	<i>give</i>	150	58(9)	24(30)	35(17)	23(24)	32(22)	30(31)
18	<i>find</i>	151	35(15)	35(18)	39(16)	34(16)	55(10)	55(13)
19	<i>need</i>	160	35(15)	59(8)	52(11)	54(7)	73(6)	62(11)
20	<i>tell</i>	166	41(14)	29(22)	31(20)	17(32)	39(17)	48(16)
21	<i>put</i>	175	95(4)	59(8)	77(6)	32(17)	66(7)	55(13)
22	<i>keep</i>	199	51(10)	68(7)	77(6)	51(8)	108(3)	67(10)
23	<i>use</i>	203	21(31)	10(54)	12(50)	21(27)	14(48)	7(73)
24	<i>help</i>	215	25(24)	34(19)	27(23)	25(22)	27(28)	25(36)
25	<i>let</i>	216	23(28)	18(35)	27(23)	36(14)	25(30)	45(18)
26	<i>feel</i>	219	70(7)	48(11)	43(14)	38(12)	63(8)	62(11)
27	<i>believe</i>	250	95(4)	82(5)	113(3)	151(1)	164(1)	73(9)
28	<i>call</i>	253	35(16)	42(13)	20(31)	24(23)	23(32)	27(34)
29	<i>ask</i>	254	35(15)	35(18)	43(14)	63(6)	30(24)	39(23)
30	<i>try</i>	255	42(13)	55(9)	41(15)	26(19)	66(7)	39(23)

い様々な動詞をもっと使うべきではないだろうか。例えば, (9)のような *be* 動詞を使った基本文の代わりに, (10)のような一般動詞を使ったものを使用することが可能であろう。

- (10) a. Tom looks younger than Koji.
 b. This plan sounds more difficult than that one.

次に, *think* のような節を目的語としてとる動詞について考えたい。*think* は各教科書で使用頻度の高い動詞の

表10. 各教科書における比較表現の基本文に使用されている動詞数

語	教科書	C21	NC	NH	OW	SS	TE	合計	
		<i>is</i>	3	5	5	4	4	5	30
<i>are</i>	1	0	0	1	0	0	2		
<i>was</i>	0	0	0	0	2	0			
<i>like</i>		0	0	0	2	2	2	6	
<i>practice</i>		1	0	0	0	0	0	1	
<i>run</i>		0	1	0	1	0	3	5	
<i>swim</i>		0	0	1	0	0	0	1	
合計		5	6	6	8	8	10	43	

一つであり、学習者もかなり多用する動詞の一つである。すべての教科書において、複文を導入する際、基本文として「*I think (that) …*」の形で導入されている。NC-2 (p. 35) 「*know, say, hope* などの動詞のあとにこの *that* が使われます。」のように、同じような構文で使用できる動詞が紹介されている教科書もあるが、例文や問題としても教科書で使用されているのはほとんどが *think* に限定されているのが現状である。それらの文を、例えば *know* や *say, hope* などの例と一部入れ替えたり、新 JACET8000 中学生用動詞語彙においても 27 位に位置づけられている *believe* で置き換えることも可能であり、そうすることで *think* の多用という日本人英語学習者で頻発する中間言語的特徴 (cf. Fordyce, 2007) を変え、より表現豊かに使い分ける能力を養うことは可能ではないだろうか。*want* についても同様のことが言える。教科書内で使用される *want* は大部分が *to* 不定詞を伴う形であるが、これを *need to* や *like to* など他の重要語で置き換えることも可能であろう。

最後に、どのように低頻度動詞を定着させる工夫ができるかについて考えたい。第三節で、1 回しか出現しない動詞が 3 割弱を占めていることを指摘したが、このままではこれらの動詞は学習者に習得されることは困難であろう。そのための対策としては、先に示したように、同様の構文を取る動詞との入れ替えに加え、類義語・対義語など関連語の導入の際に提示する方法も考えられるだろう。例えば、SS では *ask* は 30 位 (24 回) であるのに対して、*answer* は 55 位 (5 回) しか生じていない。また、*open* と *close* を比べると、*close* の頻度は各教科書において低い。このような関連語彙を適宜使用することで、使用頻度を上げる工夫も可能だろう。

5. 結論と今後の課題

本調査の結果、中学校で使用されている検定教科書では、出現する動詞の総数及び異なり語数において大きな偏りがあることが明らかになった。様々な語彙の中でも、文の構造を決定する動詞の習得は、生徒の英語力を向上させるためには必要不可欠な要素である。現場の教員は、自然なコミュニケーションを行う上で重要度の高い動詞を生徒に身につけさせたいと考える。しかし、教員が他の教科書を目にする機会も、自分たちが使っている教科書の語彙と新 JACET8000 のようなデータに基づいた重要語リストを見比べる機会もほとんどない。語の重要度の決定は個々の教員の経験と直感に頼ってしまっているのが現状ではないだろうか。本研究は、そういった現場の教員にとって興味深い結果を示すことができたと自負している。

しかし、本研究では、どのような意味、どのような文型で、それぞれの動詞が使用されているかについて、どのような活用形態で使用されているかについては触れることができなかった。今後の課題として、より詳細な分析を行い、さらに課題を明らかにしていきたいと考えている。また、動詞以外の品詞ではどうなのか、という点についても今後の課題としたい。

平成 29 年 3 月に公示された次期学習指導要領 (文部科学省, 2017b) では、中学校で指導すべき語数に関して、「小学校で学習した語に 1600～1800 語程度の新語を加えた語」と記されている。現行の中学校学習指導要領 (文部科学省, 2008) の「1200 語程度の語」に比べて、大幅に増加することになる。語彙選定の共通の基準なしに次期教科書が作成された場合、より教科書間の差異は大きくなることは明らかであろう。また、小中高と段階的に語彙力を養う上での妨げにもなるだろう。投野 (2016) の指摘するように、教科書語彙の「品質管理」を行う時

期に来ているのではないだろうか。学習者にとっては、効率的な語彙の習得が直近の課題である。生徒が、実際のコミュニケーションで生かせる運用度の高い語彙を、バランス良く身につけることができるよう、現場の教員、教科書会社、大学などの研究機関の連携が、よりいっそう必要となるのではないだろうか。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 16K02908 の助成を受けて行われている。

教科書

- 東後勝昭（他）『Columbus 21 English Course 1-3』光村図書，2016。
 根岸雅史（他）『New Crown English Series New Edition 1-3』三省堂，2016。
 笠島準一（他）『New Horizon English Course 1-3』東京書籍，2016。
 松本茂（他）『One World English Course 1-3』教育出版，2016。
 新里眞男（他）『Sunshine English Course 1-3』開隆堂，2016。
 吉田研作（他）『Total English 1-3』学校図書，2016。

文 献

- 大学英語教育学会基本語改訂特別委員会『大学英語教育学会基本語リスト 新 JACET8000』桐原書店，2016。
 投野由紀夫「教科書語彙の「調理法」と「品質管理」中学校改訂版教科書の語彙レベルと語数」『英語教育』64 巻12号，2016，pp. 17-19。
 長谷川修治・中條清美「学習指導要領の改訂に伴う学校英語教科書語彙の時代的变化—1980年代から現在まで—」『*Language Education and Technology*』31巻，2004，pp. 141-155。
 中條清美「英語教科書コーパスの構築と利用—先行研究の概観」『英語コーパス研究』22号，2015，pp. 77-85。
 松尾眞志「中学校英語教科書語彙の比較」『中部地区英語教育学会「紀要」』42号，2013，pp. 17-24。
 村岡亮子「中学校検定教科書で学習される語彙，学習されない語彙—延べ語数，異なり語数，語彙レンジの視点から—」，『STEP BULLETIN』22巻，2010，pp. 182-203。
 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm。
 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf。
 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf。
 Bogaards, P. and B. Laufer (eds.) *Vocabulary in a second language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. 2004.
 Fordyce, K. “A study on the use of stance forms by Japanese EFL learners in discursive and descriptive writing.” *Hiroshima Studies in Language and Language Education*, 1. 2007, pp. 145-158.
 Laufer, B. “What’s in a word that makes it hard or easy? Intralexical factors affecting the difficulty of vocabulary acquisition.” In *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*, N. Schmitt and M. McCarthy (eds.). Cambridge: Cambridge University Press. 1997, pp. 140-155.
 Nation, I. S. P. *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press. 2001.
 Saragi, T., I. S. P. Nation, and G. Meister. “Vocabulary learning and reading” *System*, 6. 1978, pp. 72-78.
 Zahar, R., T. Cobb, and N. Spada. “Acquiring vocabulary through reading: Effects of frequency and contextual richness.” *Canadian Modern Language Review*, 57(4). 2001, pp. 541-572.

注

1. 1989年学習指導要領では「別表2」に約500語が、1998年学習指導要領では「別表1」に100語が指定されていたが、その後は指定がない。
2. ここで使用されている「JACET8000」は大学英語教育学会（2003）の提案する「大学英語教育学会基本語リスト JACET8000 Version1.0」のことであり、KOCHI 語彙は Kochi 語彙研究プロジェクト（2011）で提案されている「高知県中学校必須英語彙リスト KOCHI 語彙リスト 1200（2011年7月26日検索 <http://kochi-e-project.blogspot.com/>）である。
3. 呼び名は各社で異なる。詳しい対象ページは表3を参照のこと。
4. ただし、先行研究での調査は3年間のような長期間を対象としたものではないため、3年間での頻度6回が十分とは言い切れない。今後、長期での語彙習得研究が必要とされる。
5. このような方法で行ったため、他の品詞として中学生用語彙に含まれている単語も存在する点には注意が必要である。
6. *bear* や *interest* のように、ほぼ特定の形 (*born*, *interesting*) でしか使用されていない語も含まれている点には注意されたい。
7. NCではPoint, TEではTarget Sentence, SSではBasic Dialogの中の太字を含む文のこと。
8. “*I think club activities are as important as studying.*” のような重文では、比較表現を含む節の動詞のみを数えている。

Verbs used in Japanese Junior High School English textbooks : Current Situations and Issues

MANO Miho* and SUZUE Ryoko**

(Keywords : English Education, textbooks, verbs, New JACET List of 8000 Basic words, frequency)

Junior high school English textbooks in Japan are made in accordance with the Course of Study and authorized by the Ministry of Education, Science, and Culture. When focusing on the vocabulary used in the textbooks, the choice of the words is left to the publishing company because the Course of Study does not include word lists. English teachers are not given any information about the differences among the textbooks except for the word list in the textbook. This study examined six authorized junior high school English textbooks and showed their differences in the vocabulary and the frequency, which will benefit the teachers who teach English by using the textbooks. We searched for verbs and verb frequencies occurring in sentences. The results clearly showed extreme unbalance in the frequency, for example, the verb, *be*, accounted for almost 30% of the tokens of verbs in every textbook. The choice of verbs also varied among textbooks, and the verbs did not cover all of the words in the word list for junior high school students suggested in the New JACET List of 8000 Basic words. These results indicate the necessity to set a criteria for the choice of the vocabulary and their use in textbooks and also call teachers' attention to how to teach basic and important words in this situation.

*Department of English Language Education, Naruto University of Education

**Kamona Junior High School, Tokushima City